



いとう



海援隊旗(二隻きの旗)

<http://www.ryoma-kinenkan.jp>

謹賀 KINGA SHINNEN 新年



先の見えぬ時代に 責任の重さ自覚して

明けましておめでとうございます。

旧年、国民の期待を担って自民から民主へ国の政権交代が行われました。しかし、日本を取り巻く政治、経済、社会、いずれの状況もまだ定まりません。根幹が揺らいでいます。「平成22年・寅年・2010年」は期待と不安のスタートです。先のない時代だからこそ「龍馬」を標榜する県立坂本龍馬記念館としてはずしりと責任の重さを感じるわけです。龍馬の手紙にある「世の中のは月と雲・(中略)・天下の世話は(中略)・命さえ捨てれば面白きことなり・」こんな節を思い浮かべました。殺伐時代の切迫感が伝わってくるではありませんか。現代に当っては命がどうのというのではありません。腹の据わりようの大切さを感じるのです。

龍馬と啄木のコラボ

館の今年1月から3月にかけては「龍馬のルーツ展」。新年開始のNHK大河ドラマに向けて、龍馬の育った「土壌」を分かりやすく知ってもらおうとの狙いです。

これはまだ決定したわけではありませんが、春に少し変わった企画を検討しています。岩手県の石川啄木記念館とのコラボです。「龍馬と啄木」ジャンルは違えども共に新しい世界を夢見て気骨の人生を送って早逝しました。どうコラボできるかチャレンジです。

夏場はずばり「薩長同盟・龍馬を支えた男たち展」。土佐の土方久元、筑前藩士などこれまであまり表舞台に出て

いない人にもスポットを当てながら成立過程をより鮮明にしようというものです。加えて工夫を凝らした展示資料が必ず胸に響くはずですよ。

そして、大河ドラマも佳境に入る頃、館の20周年企画「風になつた龍馬展VOL2」時代の力ーが始まります。三年企画の中間。龍馬・海舟・万次郎の足取りだけでなく彼らの心の足跡を辿ります。「時代を動かす力」の存在をたずねて。

このほか、坂本龍馬記念館・現代龍馬学会は2年目に入り、現代龍馬学会は2年目に入ります。全国発信の基点として足場固めの徹底を図ります。子供コーナー、ホームページ、インターネット検定、目前に迫った開館20年の節目企画の検討にも取り掛からねばなりません。

開館20年の節目企画の検討にも取り掛からねばなりません。

朗読コンサート

東京の離島「利島」でも

それに三月には「あの声が聞こえる、朗読・コンサート」の仕上げ公演が待っています。女優の小林綾子さん、シンセサイザー奏者で作曲家の西村直記さん、記念館職員によるこのイベントは地元の方々に、より

龍馬を理解していただくという狙いでこれまでに県下七箇所で開催され、好評です。3月の四箇所は県東部です。それに飛び入りで、東京の離島「利島」での公演もまきまりました。休む間はありません。館は今年も課題を抱えながら龍馬ファンの目指す「龍馬の殿堂」として頑張りたいと念じております。よろしくお願いたします。

(森健志郎)



館2階「近江屋」セット前で全職員の新年的ご挨拶

子孫が熱く語る よみがえった龍馬・海舟・万次郎 会場に“平成の風”吹いて

十月にオープンした三年連続企画「風になった龍馬展」勝海舟・ジョン万次郎・龍馬」に合わせ、三人のご子孫が大いに語り合いました。シンポジウムも三年間続きます。

パネラーは勝海舟子孫・高山みな子さん(鎌倉市)、ジョン万次郎五代目・中濱京さん(名古屋)、郷土坂本家九代目・坂本登さん(東京都)。西村直記さんのシンセサイザー演奏も会場のムードを高め、三人の個性あふれる話に満席の聴衆二百人は笑い、うなずき、熱い拍手を送っていました。出合いの不思議、まさに時代の不思議を感じるような当日の一部をお伝えします。

前田 由紀枝

大事なものは「自由・平等・平和」

森館長 坂本龍馬記念館は再来年開館二十周年を迎えます。それに向けて三年連続企画「風になった龍馬」が始まりました。柱となるのは、龍馬、勝海舟とジョン万次郎。三人の根源にあるのは、自由と平等と平和。それらは人間の一番大事な根幹です。その根幹が揺らぐ平成の現代と幕末は似通っている。龍馬の出現を待ち望まれるのが今の時代ではないかなと思います。そこで、今回



坂本登さん

のテーマは「時代の不思議」でお話していただきます。

幕末から今につながる子孫たち

坂本登 私は郷土坂本家の九代目ということで、一九三七年二月北海道十勝に生まれました。おやじが山登りに行っていたとき、お袋が家畜の世話をしている最中に馬小屋で生まれ、そこで育ちました(※注 登さんは農民画家・坂本直行の長男)。

高山みな子 私はこれがデビューになります(笑)。

海舟の子孫と申ししても16分の1のDNAを引き継いでいるだけのことで、すけれども、こうやって大勢の皆様方と出合える幸せに感謝しております。海舟は物おせず誰とでも会ってらるんですね。私も出合いを大切にして生きていきたいと考えております。
中濱京 万次郎は土佐の中浜に生まれ、十四歳のとき漁に出た宇佐から五人で漂流しました。鳥島に漂着し、アメリカ捕鯨船・ジョン・ハウランド号のホイットフィールド船長に助けられます。

結果的に十年間アメリカに滞在することになります。その約半年の年月は海の上の生活でした。後のフランクリン号での航海では一等航海士にまでなり、世界に通じる日本人でたった二人の船乗りになり成りました。それは捕鯨という命がけの仕事の中で培われたものです。

今もホイットフィールド船長と中濱家の交流と友情は続いており、まっすぐ生きること、三所懸命に人生を歩むこと、隣人愛を大切にしていくことという先祖のメッセージを大事に守っているつもりです。

大いにわいた「秘話」

坂本 坂本龍馬は高知じゃないか、あなたはなんで北海道にいらんだとよく言われます。龍馬の北海道開拓の遺志を継いだ、曾祖父の自由民権家・坂本直寛が一家で北海道・浦臼に渡った。その婿養子の弥太郎さんが坂本家の資料の多くを京都国立博物館に寄贈したんです。

私の父直行は、祖父・弥太郎から坂本家の人間だ、しっかりしろ、勉強しろって言われ、それが嫌で厳しい十勝の原野に飛び出しました。おやじも「いっせう」でございませうから、龍馬は認めるけれども、龍馬は龍馬だ、わしはわし



西村直記さん

高山 私の祖母は正代といって海舟の孫です。百歳まで長生きしたので、小学生だった私は、幼いころ勝家で数年前暮らしていた祖母から海舟の話をよく聞きました。海舟はお酒がダメでお菓子が好きだったんですね。勝家ではお菓子専用の部屋がありました(笑)、子どもたちは海舟のおこぼれがいつ回ってくるのか楽しみに待っていました(笑)。

海舟は怖いおじいさんで、出かける時と帰ってくる時はみんな玄関の前に一列に並んで頭を下げています。そこを海舟がすたすたと歩いていく。子どもたちは怖くて顔をあげられないので、一緒に住んでいてもおじいさんの顔はあ



高山みな子さん

らり見ることがなかった(笑)。

中濱 私が家でよく聞く話は、万次郎がホイットフィールド船長から受けた隣人愛についてです。幕府の高官や大名に呼ばれればアメリカ事情を話し、一方では当時乞食として蔑まされていた人達と親しく付き合っていたため、「万次郎は不思議な人だ。大名とも話すし乞食とも話す」と言われていたそうです。

万次郎はお金や地位にこだわ



中濱京さん

厳しい捕鯨船の生活の中で、人間であることの本质を学び、強い意志と信念をもって生きたのです。アメリカで民主主義や隣人愛、自由を吸収して、日本に帰って「自由の風」を巻き起こしたのではないのでしょうか。



進行 前田由紀枝

坂本 やっぱ風が吹いているんですね、お互いね。

らず、身の回りの困っている人、可哀そうな人を少しでも手伝おうとする精神を、船長からしっかりと受け取っております。

「風」を語ろう

坂本 風はやっぱり感じるものかな。

話は違いますが、私が小さい時、床の間に勝海舟、西郷隆盛の掛け軸が無造作に掛けてあったんですね。おやじがお客さんに自慢げに説明したのを今でも覚えております。農家の床の間らしきところにぶら下げておくと、ハエがどんどん来てハエの糞だらけになって跡が残りました。今、記念館に展示されています(笑)。

中濱 万次郎は「自由な風」を日本に持ち帰ったのだと思います。貧しい漁師の子として生まれ、漂流した少年は、たった二人で言葉も文化も全くわからない国に行くという決断しました。

厳しい捕鯨船の生活の中で、人間であることの本质を学び、強い意志と信念をもって生きたのです。

幕末の風に乗ったかと思って、幕末の風に乗った。貧乏旗本がベリベリ来航時、長崎海軍伝習所や



風になった龍馬展シンポジウムVOL.1 子孫は語る
「時代の不思議」～同じ夢に結ばれて～

高山 海舟は平和主義です。刀の柄のところにこよりを巻いて抜けないようにしていましたし、いつも日本国という大義があった。政府はどうあるべきか。内ゲバやつる時じゃないと、いったようなことです。

龍馬さんも海舟も若い仲間が亡くなることを残念がった。万次郎さんも、この三人がタグを組んでいたら、戦争体質は変わってたんじゃないか。海舟の平和精神を、私も心に留めております。

時代を動かすエネルギー

森 坂本直行さんは俺は俺よ、龍馬は龍馬よ、と言ってしまおう。ジョン万次郎さんは隣人愛。龍馬

は感性の人で、勝海舟は努力、實力の人です。感性の人間は、実力のある人前では平伏しようとする。逆に勉強している人は、感性の人を「あつこの人だ」と見抜く。三者はうまく混ざり合って歴史が動いたんじゃないかな。三者はうまく混ざり合って歴史が動いたんだと感じました。

来年は「時代の力」、三年目になったら「時代は未来に」というテーマで、同じ皆さんに集まっていたとき、もう一段つこうだ話を聞きたいと思っています。ありがとうございました。

「鐔は知「ていねい」」

土佐歴史資料研究会
現代龍馬学会会員 小島 一男



これまで私は航空の専門技術分野の仕事に携わってきたが、退職を機に興味の世界にのめりこんだ。といってもその趣味は、学生時代からのものだからもうキャリアで言えば50年が近い。一言で言えば「歴史」。それも日本の歴史、中でも現在は「幕末」である。興が深く探究心はまだ刺激を受け続けている。身辺を見回してみると、古文書類をはじめ刀剣類、古式銃など古の「証明物件」に埋まっている。興味なき人から見れば無意味と思われるだろうが私にとっては「宝物」である。今回、ご紹介するのも、その宝物のひとつなのである。刀の鐔(ツバ)だ。

信家作 一心不乱にの鐔 候爵 山内豊景氏蔵



きっかけは1冊の本

その鐔には呼び名があつて、「一心不乱にの信家」。
後々紹介することになっていくが「信家」は戦国時代、鐔工の王者と言われた名工である。作品に観念的な言葉が彫り込まれているのが特徴で、豪壮、格調高い作風がその時代背景を強烈に映し出すのが魅力となっている。刀剣は武士社会の象徴であり「魂」である。それだけに、所持する者



宗義作 一心不乱にの鐔

迷の時代、容堂がこの刀と鐔に託して後藤に渡した思いは、その後、後藤の歴史の中で後藤が果たした役割成果から、想像できよう。

あの大政奉還、龍馬と仕上げた大仕事である。龍馬と語り合う後藤の腰には左行秀と刀身には「一心不乱にの宗義」が納まっていたのである。

龍馬が刀剣好きであったことは有名である。当然、親友、後藤の腰にある刀剣、鐔が話題に上ったことは容易に想像できよう。また、龍馬が「瞬のうちに後藤の思いを察知したとも思われる。お互い「一心不乱」命がけて生き男同士なのだ。その状況、胸の

鐔に代わって

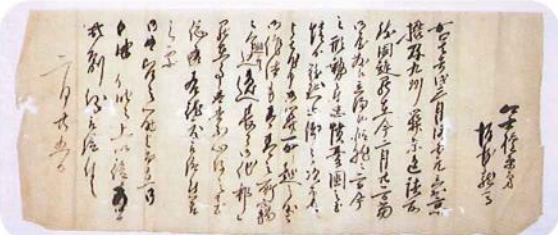
書きたいのは「信家」「宗義」の鐔のこと。刻まれた「一心不乱に」の言葉に始まる鐔の物語である。鐔を知るための初歩的解説も交えながら、若干の推察、想像も加えながら、単なる資料報告ではない、読み物に仕上げたいと考えている。
ご期待ください。

京都土佐藩邸資料574点 館の目玉に 寺田屋・龍馬・以藏・野老山吾郎

「京都土佐藩邸資料」
十二月初めに、念願の京都土佐藩邸資料が当館へやってきた。この資料の情報は、一昨年の六月京都国立博物館から頂き、紆余曲折を経て、ようやく高知県が購入できた。元の所蔵者の方や間に入ってくださった方々、陰で応援してくださった方など、多くの理解ある方々の協力のおかげである。



佛敎大学の青山忠正教授の話によると、これまで全国的に藩邸の研究はほとんど行われていないという。その理由は、どの藩もまとまった藩邸の資料が残っていないためである。それが今回は、五七四点(仮目録の点数)ものまとまった形で発見された。
内容は幕末における京都土佐藩邸探索方の資料がほとんどである。様々な事件の情報収集、藩邸での訓練の様子、藩邸の門の出入り帳、さらには、土佐藩の支配構造の一端をかいま見ることができ資料まである。中でも最大の注目資料は、寺田屋で龍馬を襲った伏見奉行所が、直後に京都所司代へ報告した文書の写しである。龍馬が持っていた書類を押収したと書いている。逃げ込んだ材木小屋が特定されたりと重要な内容が記されている。寺田屋事件後の最も早い記録であり、幕府方の記録という点で、幕府方の意図を探ることができ貴重な資料といえよう。
その他、岡田以藏が京都で捕まった時の罪状文、池田屋事件に



関わって切腹した野老山吾郎の切腹直前の供述書などが目を引く。さらに、明保野亭事件で切腹した土佐藩士・麻田時太郎の供述書は、これまで伝わっていない歴史を覆すような内容で、大変興味深い。土佐勤王党関係の資料も多数ある。これらは、すべて土佐藩の役人側の観点から集められたもので、反勤王党の資料であるため、土佐藩の考えを推し量ることもできそうである。また、吉田東洋を暗殺して脱藩した安岡嘉助が捕縛されたことを報じた文書の中には、「肉お食ひ而も余り有之奴」とも記されており、下士が憎い上士の気持ちがよく表れている。
その他、他藩の人と会合した時に使ったのか祇園の料亭の割勘請求書や、女性に入れ込んで藩の金を使い込んでしまった人のことを記した文書なども面白そうである。

今後様々な角度から研究することによってさらに新しい発見が出てくる資料なので、期待していただきたい。
**甲藤家寄託資料二点も
見応え十分
龍馬の刀
脱藩罪赦免文書**

「甲藤家寄託資料」

ところで、大河ドラマに合わせて全国で関連の新材料が発見されている。当館にも貴重な資料が寄託されることになった。

龍馬には、「土佐の友人である甲藤馬太郎の甲冑と龍馬が持っていた刀を交換した」というエピソードが残っている。その甲藤家御子孫から、その刀と、二回目の脱藩罪赦免の公式文書の写しが寄託されることになったものだ。龍馬伝で注目が集まる中、多くの方に「ご覧頂きたい」というご配慮からの申し出であった。

両方とも存在は知られていたが、随分昔高知城懐徳館で展示されて以来、博物館で展示されたことはない。文書の方は、伊豆の下田で勝海舟が前土佐藩主の山内容堂に頼んで龍馬らの脱藩罪が許されたことに関わる資料である。龍馬はその後京都の土佐藩邸で三日間謹慎したのち、お構いなしとなった。文書は公式文書を写したもので、書き損じ



甲藤家の資料は、本年一月十二日から当館で開催する「龍馬のルーツ」展で展示した後、四月末からは「龍馬伝」の全国巡回展へも出品する予定となっている。
三浦 夏樹

龍馬に届く年賀状

■龍馬街道

「ほいたらやってみいや。」
そう言われて、なんだか龍馬に
そう言われた気になってきた。
2009年5月のことである。

はじめまして。「龍馬に届く
年賀状」の企画に携わりまし
た、吉富と申します。

漢字は違うが、名前がシン
サク。長州下関出身。幕末・
維新は意識せざるを得ない。

受検・就職・転職の前に毎回龍馬に会いに行き、力をもらった(つもり)。

いつか龍馬に恩返しをしたいと思っていました。

未曾有の不況で日本中が元気を失っている。

100年に一度の不況なら、

100年に一度のアイデアで応えたい。

こんな時、龍馬ならどうするのか…。

龍馬に年賀状を送るというアイデアは、そんな思いから生まれました。

たくさんの人達と出会い、半年の月日を経て実現。冒頭の言葉は、
企画書を持ち込んだときの森館長の言葉です。おかげさまで発売日
の10月20日、記念館の電話は鳴り止まず、ホームページも繋がりにく
くなるなど予想以上の反響をいただき2,000セットは数日で完売。改めて、
龍馬が愛され、そして求められている事を実感いたしました。

龍馬の偉大なところは、150年近く経ってなお、こうして人と人を繋げて
いくことだと僕は思っています。

龍馬に作ってもらったこの繋がりと経験を活かし、「おもしろき こと
もなき世を おもしろく」みんなが元気になる、クスッと笑えるそんなアイ
デアを試してみたいと思っています。

最後になりましたが、実現に向け協力していただいた皆様にご心よ
り感謝いたします。 吉富 慎作



■龍馬年賀状雑感

坂本龍馬年賀状の記念スタンプのイラストを担当いたしました。
年始にみなさまの元へと届く年賀状に土佐桂浜の情景が浮
かび上がるようなイラストをイメージし、桂浜の景色に悠々とそびえ
る坂本龍馬像と太平洋に向かって迫り出す坂本龍馬記念館を
組み合わせました。

イラストは、手描きで制作したものを印刷しておりますので、ペン
のタッチひとつひとつから手描きの良さを感じていただけたと思
います。

龍馬年賀状を送られる方の気持ちが伝わり、受け取られる方
みなさまに喜んでいただけることを願っております。 山中 真優

■龍馬年賀状雑感(事務局)

龍馬年賀状発売数日前、突然年賀状事務局担当になって
しまいました。その日から怒涛の日々の始まりです。

龍馬年賀状って何?まずはそこからです。販売数は限定2000
セット。龍馬の立位写真が年賀状の裏面に印刷されたものが5
枚と、龍馬に宛てた年賀状を書くハガキが1枚入った、計6枚1
セットで525円。龍馬に宛てた年賀状は、1月1日、桂浜の龍馬像
に届けられる。それが「龍馬年賀状2010」でした。今回初めての
の試みで、福岡にある龍馬街道のYさんが企画したものでした。

急遽、事務局担当となり何をしていたのかと困っていた私に、
事務のNさんが協力してくれる事になりました。それこそが事
務局運営のカギとなる重要なポイントでした。発送をお願いす
る郵便局のSさん、龍馬街道のYさんとの初顔合わせと打合わ
せ。きっと私ひとりでは無理だった事でしょう。

2009年10月20日、インターネット「龍馬街道」でのネット申込、
記念館での店頭販売のみでの受付開始。記念館の電話はパン
ク寸前。一日中鳴り止みませんでした。手書きでの受注メモ
の山。次々と送られてくる受注メール。ほぼ3日で完売です。名
簿作成、入金確認、発送準備…。12月に入り、ようやく終焉を
迎えられそうです。

1月1日、桂浜・龍馬像。龍馬に宛てた年賀状が届きます。ど
んな年賀状が届くのでしょうか。 渡辺 曜子

■「中村斗世木ボトルシップ 世界の帆船」展 —小さな船で夢の大航海—を終えて

洋船・和船合わせて60点余りのボトルシップが、太平洋の水平線をバックに並
んだ50日間。海の見える・ぎやらしいでは好みの船で世界を航海することができ、
会場を訪れた方々の様々な驚きと賞賛が印象的だった。

広島から家族で来館した小学生の男の子。自分でも模型を作っているらしく、
将来こういうのを作ってみたいと熱心に作品の写真を撮っていた。最後に少年の
お父さんが「神の手と握手をさせてもらいなさい」と言った。中村さんと握手をして
家族で写真に納まった少年は、恥ずかしそうに「僕も頑張ります!」と去って行った。

船を作る道具や材料、船体や背景に描かれている景色、作品1つ1つに本人
の思い出と人生がたくさん詰まっている。今回の個展は30数年分の集大成であ
り、今年結婚50周年を迎えられた中村夫妻の記念でもあった。来年3月には80歳を迎える中村さんは、「体力の続く限り作
品作りを続ける」と意気盛ん。人生を楽しむことを教わる作品展となった。



中村 昌代

入館状況

2009年12月20日現在(開館以来6,566日)

◆総入館者数 2,398,197人

◆2009年度最多入館 5月4日 3,594人

2009年度最少入館 4月16日 84人

2009年度1日平均入館者数 532人

◇最多入館 1993.5.3 3,700人

◇最少入館 2004.10.20(台風のため) 8人

編集後記

NHK「龍馬伝」の影響直撃である。三浦学芸員はまるでNHK大河ドラマチ
ームの“専属”となった。そればかりではない、番組、雑誌取材、イベント出演、前
田学芸主任も同じである。大河は大波に成長している。まだまだ大きくなる。館に
とってはうれしい悲鳴だが、もはやスタッフ一同絶叫に近い。そんな最中の新年号。
原稿チェックに若干の不安を残した。間違いなきことを祈りながら・・・明けまして
おめでとうございます。(モ)

館だより「飛騰」第72号(年4回発行) 表紙題字:書家 沢田 明子 氏

発行日 2010(平成22)年1月1日

発行 高知県立坂本龍馬記念館

〒781-0262 高知市浦戸城山830

TEL(088)841-0001 FAX(088)841-0015

http://www.ryoma-kinenkan.jp

「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00~17:00 年中無休

入館料 一般500円・高校生以下無料

身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・
戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者1名
高知県・高知市長寿手帳所持者は無料

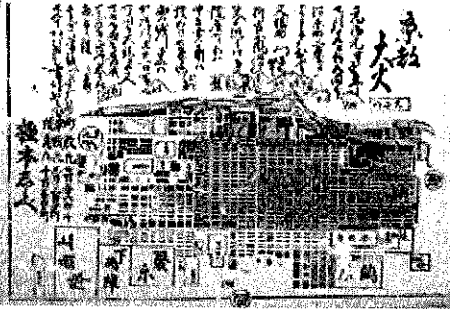
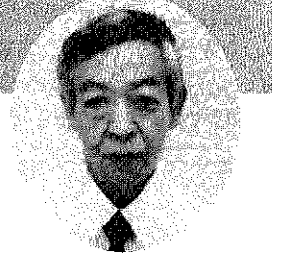
館だより「飛騰」は、郵送料のみのご負担でお届けいたします。ご希望の方は、90円切手5枚をお送りください

高知県坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

私のテーマ

龍馬散策—龍馬の秘め事—

刈谷 卓弥



1. 散策の発端

元治元年6月、龍馬が姉乙女に宛てた「かの小野の小町が」で始まる手紙があります。「ねぶと論」で知られるこの手紙は表

面上秘密にしなけらばいけないような中身は書かれていません。手紙の内容は、「腫れ物」を治療するときには十分に腫れあがってから針を刺さなければ治癒しないように、物事が成功するかどうかはタイミングが大切であるという趣旨です。しかし龍馬は人に見せては「けしてけしていかん」と口止めています。何故でしょう。この手紙の裏側に龍馬の本心あり、それを乙女以外の人には知られたくない、との思いが感じられるのです。

この龍馬の手紙には心に秘めたものがある。しかし彼の秘め事とは何でしょうか。

時代背景から見れば、禁門の変・京都炎上の2か月前、長州が兵を率いて上洛しようとする攘夷熱の真っ盛りの時という状況を考慮すると、「今はそのタイミングではないよ」と言っているようにも感じられます。しかし私にはそれ以上に何かもっと深い秘密があるように感じられるのです。土佐勤皇党の同志にも言えない龍馬の本当の心の内が。それがどのようなものであったろうか、私は訪ねてみたい。

そこで幕末という時代を鳥瞰してみると、「攘夷」という言葉が竜巻のように現れ、暴威を振るい、突然消えていったような風景に見えるのです。明治維新以降「攘夷」という言葉は完全に歴史から消えてしまふ。「攘夷」とは一体何なのか、不思議な現象です。

2. 攘夷とはなにか

言われるところによると攘夷という言葉は比較的新しく、ペリー来航の後に孝明天皇が伊勢神宮や七社七寺に賜った御教書の中で、「速やかに夷類を退攘し、国体に拘わらしむ莫れ」と記したのが「攘夷」の言葉の始まりでした。

天保年間には江戸幕府は「無二念打払令」を発し、黒船を見つけ次第無条件で打ち払うことを命じていました。ペリー来航の後幕府は開国に政策変更したが、水戸藩の烈公松平齊昭は井伊直弼の開国策に反対し攘夷論を強硬に主張していました。

しかし彼は、「われに戦うの決心ありて和するは即ち和なり、その決心なくて和するは和に非ずしてこれ降なり。」と攘夷を説明しています。要するに条約交渉は虚喝に怖気づいて行くものではなく、独立国日本としての自負と気概を持ってもってなされるべき、と主張していますが、その内容は松平春嶽・山内容堂が直接会って確認しているように、全面鎖国ではなく、必要な港は開いてもよいとする、条件付き鎖国の主張でした。あるいは拳を振り上げた手前面子があって手を下せない状況であったように松平春嶽は回顧しています。

文久2年9月、長州藩を代表して幕府と交渉していた周布政之助は、幕府に「破約攘夷」を朝廷に奉勅するよう求めましたが、彼のいう攘夷とは「攘ウトハ排スルナリ 排シテ開クナリ 夷ヲ攘イテノチ国開カ

ルベシ」との意味でした。つまり最終的には「国は開かるべし」であり、この時期の長州は無条件攘夷（「無二念打払令」）の意味ではなかった。この時期の長州はそれほど過激ではなかったように思われる。

一部肥後勤皇党のように無条件攘夷論もあったようですが、それが何故文久2年、元治元年に見られるように突然肥大化し過激化したのか、不思議な気がします。

3. 文久2年10月の幕府の状況

龍馬の秘め事は文久2年10月に勝海舟との初めての会談にその淵源があるように思われる。それはこの会談が彼にとってエポックメイキングな出来事だったことは明らかだからです。このとき龍馬に何かが起こった。

あらためてこの年のこの月を振り返ってみると、9月には京都の朝廷が今年2度目の勅使を江戸へ派遣し、朝廷の意志として「破約攘夷」を幕府から朝廷に奏請するように要求することが決まっていた。勅使の江戸到達時期は11月頃になる予定であり、幕府の本音では開港を奏請したいと考えていたが、長州藩などの「破約攘夷」周旋などもあり結論をだしあぐねて、侃々愕々の議論はするが結論はだせないでいた。

そんな中、10月1日、後見職一橋慶喜が開国論を展開し始めます。「万国一般天地間の道理に基づいて互に好しみを通ずる今日なれば、独日本のみ鎖国の旧套を守るべきにあらず。故に我より進んでも交りを海外各国に結ばざるを得ず」

つまり国内の天理より「万国の道理」、国際法（万国公法）を優先すると主張する積極的開国論だ。この意見を朝廷の意に反して奏請すると主張し、幕閣はその理路整然、明快さに驚き、全員賛成します。松平春嶽もこの開国論を激賞するが、その後それに加えて、「朝廷が開国論を受け入れない場合は幕府は朝廷へ政権返上（大政奉還）する覚悟を定め」てはどうかと徳川慶喜に提案します。こうして「万国公法」と「大政奉還」のアイデアが日本史に初登場となります。

ところが10月中旬になって山内容堂は、「攘夷を奉勅しなければ、朝廷の攘夷が「攘將軍（討幕）」になるかもしれない」と持ち前の大声で恫喝してきて、幕議は攘夷奉勅にあっさりと転換してしまいます。

このようにしてこのアイデアは一旦表舞台から退場するが、その後大久保一翁が「覚悟」ではなく「大政奉還をする」としてはどうかと提案します。幕閣の大部分はこれを聞いて冗談だと思ったのか突然大笑いしたそうですが、越前藩の資料によるとこの時、松平春嶽、横井小楠、山内容堂は本心から感心し、「他に策はない」と手を打った、と言います。結局大久保一翁のこの意見は幕府の正式決定とはなりませんでしたが、海舟、小楠、一翁、松平春嶽（山内容堂を含めて）たちの胸の内ではこの後も密かに生き続け、翌年にも松平春嶽の意見として歴史の表舞台に登場してきました。

4. その時龍馬は?

それでは海舟と小楠の「攘夷論」はどうでしょう。同じころの勝海舟日記によると、

小楠曰く、「(略)それ攘夷は、興国の基を言に似たり、しかるを世人徒らに夷人を殺戮し、内地に住ましめざるを以て攘夷なり(無二念打払

とおもうは甚不可なり。今や急務とすべきは興国の業を以て先とするにあり、区々として開閉の文字に泥むべからず、興国の業、侯伯一致、海軍盛大に及ばざれば能わず、今や一人も爰に着眼する者なし、又歎ずべしと」

「区々として開閉の文字」に拘泥するのではなく、優先順位の高い、もっと大事なことがあるではないか、「必戦の覚悟」を持って「早く海軍を興さなければ、日本は滅んでしまうぞ」と2人で嘆いています。ここには攘夷か開港かの二者択一ではなく、優先されるべきは何かという順序の選択肢が示されています。攘夷よりも海軍盛大が先ですよ、西洋文明に誇りを持って対等に渡り合う場、土佐は「海」ですよ。

龍馬はこのような時期に海舟と会談することになります。

千葉道場の剣士、土佐藩士と交わり、尊王だ、攘夷だと、話題がその一点に集中し、龍馬の精神の緊張がその方向に引きずりこまれていく中で、海舟の口から「海だよ、海」と静かにゆったりと言葉が漏れ

てた時、バリバリに緊張した龍馬の心の奥に眠りこんでいた川田小龍の記憶、海への志の思い出が奔出したのではないのでしょうか。まるで「ねぶと」のように大きく膨らんだ「攘夷」という言葉の風船へ「海」という言葉が針のように突き刺さって破裂し、風船の中から「海! ああそうだった」という思いが湧き上がってきた。このように想えるのです。

この頃海舟は海軍奉行並として人材育成が急務だと主張し、その人材は幕府内で集めるのでは間に合わない、譜代外様を問わず広く日本中から志のある人物を募るべきである、と声を大にして主張していました。ここに龍馬と海舟の接点が生まれた要因があったのではないのでしょうか。

「万国公法」と「大政奉還」のアイデアは海舟、小楠、一翁、松平春嶽たちの胸の内では密かに生きていたもので、これがやがて龍馬の心に根付き、故郷の同志たちには言えない「秘め事」として生きていたのではないのでしょうか。

「ほれ話」

第2回全国大会にむけて

新年となることさぞく現代龍馬学会の全国大会の準備がはじまる。

第二回は四月に1泊2日で開催した。

しかし、今年の土佐は大河ドラマ「龍馬伝」で熱気が出ており、「五月のゴールデンウィークが終わるまでは落ち着かない」と云う。

五月中旬か下旬の桂浜で大会開催となると、土佐では若葉の香る季節、絶好である。ちなみに五月には桂浜では龍馬像の前で、恒例の朗読会がある。司馬遼太郎著「竜馬はゆく」を、龍馬ファンや観光客が像に向かつて立ち、3分程度づつ朗読し、読みつなげてゆく企画がある。

第二回の反省から、会期は「研究発表」の1日だけとなり、夕刻の懇親会で閉めることになりそうである。

宿泊される県外からの会員は、龍馬伝イベント、満開の土佐路を散策するコースを事前に決めておくことよ、だろ。県内の会員たちは、ボランティアでお手伝いしてくれ方が多い。

毎月の例会の行き帰り、脳梗塞の後遺症で車運転を控えている私の「アシ」は、必ず会員の誰かが喜んで「交代でやってくれる。飛行機やバス、列車で高知に来て大会に出席される方で、県内各地をまわりたい方は、早目に見学先など会員同志か私に教えほしい。お接待の土地柄でもある土佐の男女は、意外と世話好き。場合には「ウルサイくらい」世話するだろう。

さて、一番お願ひしたいは、皆様の「研究発表」である。

第二回は、無理やり、発表者をお願いしたというのが、正直なところである。

バイオアソシエを担った七人の侍の「紀要(発表文集)」も、まもなく出来上がる。龍馬研究、龍馬関係人物研究、幕末研究、龍馬精神論、ジャンルも多彩で自由。これを参考に、皆さんの「研究発表」(30分以内)をしてほしいのです。

新年を皆様の協力で、「知の殿堂」の基礎づくりをしつかりさせたいと願っています。

会長 永国 淳哉

コラム・龍馬のこと

日本でも誇れる風景

宮尻 千恵子

龍馬の変名に「才谷梅太郎」と「大濱涛次郎」というのがあるがそれは、坂本家の祖先の出身地にちなんでいる。

この才谷は高知県南国市の山間にある小さな村で、入ると1klほどで初代の太郎五郎の墓所が左手小山にある。そのまま1キロほど進んだ行き止まりは「龍馬公園」である。奥に坂本神社があり2代目日本彦三郎と3代目太郎佐衛門の2つの墓と家族が静かに眠っている。その墓碑の字が「坂本」ではなく「阪本」などは未だに解明されていない。因みに横須賀市大津町信楽寺のお龍さんの墓碑には「阪本龍馬之妻龍子之墓」と「阪」の字が刻まれている。建立には土佐出身の田中光頭(宮内大臣)も係わっているから間違はずはない。ではなぜ。謎は未だに「謎」である。

私とその初代の家約200坪を購入したのは26年前のことで、その日は龍馬像建立の日と同じ5月27日であった。

古家「大濱屋敷」の手作り改装も私のこたわりで、長年かけ、家族や知人その他大勢の方の善意のもとすすめ、少しずつ今の(才谷梅太郎の里)の概要が出来上がった。そこにはいろいろや五右衛門風呂、中でも好評なのが「オクド」でたこごはん。皆格別と喜んでくれている。けっこうウルサイ現代龍馬学会の永国会長にさえ「なかなかいいやいか」と気に入っていただいている。

また、龍馬公園には100本以上の紅白梅がある。私はこの風景が好きだ。大きさではなく日本でも誇れる風景と言ってもいいくらいに思う。見るにつけ龍馬が「才谷梅太郎」の名前を好んだ理由がよく解るような気がする。生活道がやさしく手入れされ、この風景をさらに引き立てる。感謝。感謝。守り残すべき所が土佐にはまだ沢山残されている。

毎年桂浜の銅像前で実施する龍馬研究会の朗読会では、ここ才谷の山野の花々を助け、舞台を演出して楽しんできた次第である。では又。

会員便り

「変名 錦戸広樹」

皆川真理子

社中時代、陸奥宗光(伊達小次郎)が、錦戸広樹を名乗っていたことはあまり知られていない。ここでは、錦戸の変名が登場する資料をいくつか紹介したい。

神戸海軍操練所が閉鎖された後、宗光は、長崎で英語を学んでいる。唐通詞、何礼之の英学塾で学ぶ慶応元年の主要な塾生に、薩摩出身として白峰駿馬と錦戸広樹の名前が記されている(大久保利謙「幕末英学史上における何礼之?特に何礼之塾と鹿児島英学との交流?」)。

慶応二年正月には、京都にいる小松帯刀に、上杉宗次郎が自害したことを知らせる使者として、錦戸広樹が派遣されたことが、薩摩藩の長崎在勤の野村盛秀(宗七)と、上京中の薩摩藩家老の桂久武の日記に記されている。

「長崎丸明日出航之筈二付、錦戸廣樹差越候間、上杉一條等小太夫大久保氏へ申渡す」(「野村盛秀日記」慶応二年正月廿八日条)

「西郷氏より書状到来、上杉宗次郎自殺一条小松家抱え錦戸広樹より野村宗七より書状致持参候由にて、小松家より被相廻候とて到来」(「桂久武日記」慶応二年二月十日条)

錦戸の名前は、龍馬書簡にも記されている。長崎で、鹿児島へ向う三邦丸を下船した錦戸が、料から預かった手紙(多賀松太郎宛、慶応二年三月八日付)の表書き部分に「此書錦戸二頼み遣す但シ太郎ハ又変名在之」と書いてある。

この手紙の「太郎」というのは、陸奥の最初の変名が「錦戸太郎」であったのを、「錦戸広樹」に変えたことを意味していると思われる。宗光の長男広吉が宗光の従弟、岡崎邦輔から入手したという慶応元年当時の集合写真には「錦戸太郎」とあり、「錦戸は先考也」と記されている(萩原延壽「陸奥宗光」)ことからの推測である。

能の演目「錦戸」には、ワキ方とし「錦戸太郎」が登場し、錦戸太郎は奥州藤原三代秀衡の子国衡とされている。だが、「尊卑文脈」

では、秀衡の子頼衡が錦戸太郎とされている。「陸奥系譜」(陸奥宗光文書)によれば、頼朝の奥州征伐に出陣し、石那坂の戦いで戦功をあげたことで、陸奥国伊達郡を賜り、以後、伊達姓を名乗った伊達朝宗と四人の子息。そのひとり、為家が、紀伊伊達家の祖であるという。

宗光が、自身の先祖が亡ぼした藤原家の長男、錦戸太郎を変名にしたのは、どのような思いがあったのであろうか。

宗光の変名を追う事で、社中時代の動向が一部判明してきた。今後も新たな資料の発掘を心がけたい。

高知県立坂本龍馬記念館

〒781-0262 高知市浦戸城山830

TEL(088)841-0001 FAX(088)841-0015

http://ryoma-kinenkan.jp